

ぬすつといわかげいせき 盗人岩陰遺跡

～縄文時代の有田～



盗人岩陰遺跡から出土した隆起線文土器

有田町の西、国見山麓の中腹を通る道路から400mほどさらに登ったところに、周囲が杉林に囲まれた大きな岩の塊があります。地面からの高さ3m、幅4m、奥行き5mの岩は風化作用によって南側がえぐれ、土がそれほど堆積していなかった太古には雨露をしのぐのに十分なスペースがあったのでしょうか。いつのころからか盗賊たちの根城になり盗人岩と呼ばれるようになりました。このような遺跡を岩陰遺跡といいます。

佐賀県立博物館によって昭和42年と48年に発掘調査が行われ、上層から順に阿高式土器、条痕文土器、押形文土器、隆起線文土器と呼ばれる土器群が出土しました（別表参照）。中でも隆起線文土器は人類が焼き物を使うようになった頃の土器で、最古の縄文土器として位置づけられています。この土器は粘土の紐を帯状に器面に貼り付けて文様にしたもので、全国でも数えるほどの遺跡からしか出土していません。佐世保市大野の泉福寺洞窟遺跡から出土している豆粒文土器といわれる土器も、最古の土器の有力な候補ですが、学界では豆粒文土器も隆起線文土器の一種であるという考えが大勢を占めています。この他にも近隣の遺跡では、隣の長崎県佐世保市岩下岩陰、吉井町福井洞穴

でもこの土器が発見されており、特に福井洞穴は歴史の教科書に掲載されたほど有名な遺跡です。

なぜ、盗人岩陰の人々は最古の土器をつくるようになったのでしょうか。北松浦半島には縄文時代草創期の遺跡が多く、この地域で縄文時代の胎動が始まり、その一つが盗人岩陰遺跡です。

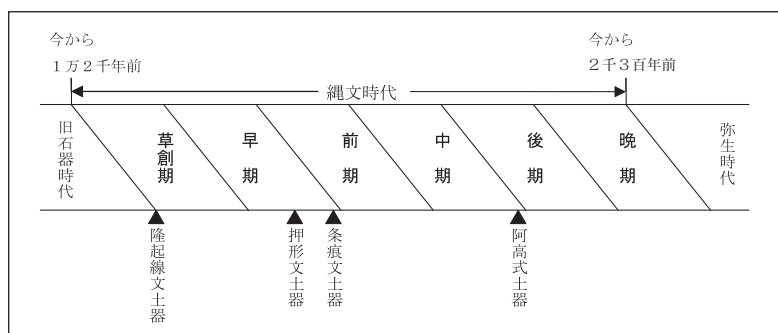
人が土器を使うようになると、煮炊きが可能になり、可食物が飛躍的に多くなります。堅いものは柔らかくなり、アク抜きも可能になりました。土器の出現が生活の安定化に果たした役割は大きかったのです。

こうして豊かな縄文時代が始まり、その嚆矢となった盗人岩陰遺跡は重要な遺跡であるといえます。縄文時代初め頃、草創期の有田地方の気温は今よりも2～3度ほど低く、落葉広葉樹の森に覆われており、秋にはドングリ、カシなどの堅果類が実り、イノシシ、ニホンジカなどの動物が生息していました。豊かな自然環境が縄文時代草創期の人々の活動を活発化させたことでしょう。

また、条痕文土器や押形文土器も縄文時代早期という古い段階の土器で、当地での縄文文化の成立を考える上で重要なものです。押形文土器は山本区の伊古石遺跡からも出土しています。

このように、有田町西部地区の国見山麓は、縄文時代の遺跡が多く発見され、「縄文の里」とも言うべき地域なのです。

(宮崎光明)



皿 季刊 山 冬 No.72

有田町歴史民俗資料館・館報

大阪毎日新聞に見る 昭和初期の有田窯業界 ～陶工に物を聴く夕～^①

季刊皿山No.70から連載している「陶工に物を聴く夕」は今回でひとまず終了します。しかし、寄贈された新聞を見る限り、最後の部分はまとめの形になっていないので、この続きが掲載されているように思われます。皆さんの自宅に保存されているものが発見されましたら、ぜひお知らせください。

今回発言されている方々は次の通りです。

寺内信一 (元有田工業学校長)
川浪竹山 (前香蘭社美術品画工部主任)
松本佩山 (帝展入選作家)
久間松次 (龍山製陶所主)
古賀平八郎 (元有田工業学校教諭)
二宮都水 (帯止作家)
加藤祥雲 (帯止作家)
金原京一 (京都陶磁器試験場嘱託)
磯松嶺造 (国立陶磁器試験場技師)
百田信一 (有田公民学校教諭)
古川邦司 (有田公民学校長)
武藤 (大阪毎日新聞佐賀支局長)

二宮氏

尾濃でも20年ばかり前までは車細工人がいましたが御承知の通り製品が機械化されて、今では殆ど陶工はおりませんので困っています。

百田氏

昔と違ってともすれば親や父兄達が、職工になすのを嫌がりますから、なんとかしてこの風を止めさせねば駄目ですなあ。

二宮氏

待遇をよくしてやらねば職工になる人が段々少なくなるわけです。

古川氏

私が公民学校で子弟をお預かりしてから今日までの経験でゆくと、どうも子弟もだが、親たちも不賛成で商人になしたいという気風があるのは実際遺憾に感じるところであります。それでいろいろ学校でもやって

いますが、老後の保障とか生活の安定とかいうものが確立されねばならぬと考えます。

古賀氏

今は死んだ県議員の^{注①}深川六助さんが存命中も、この問題についてたまたま話が出た。これが改良策として職工という名が悪いから工手と名を変え、また着ている着物が尻切トンボで貧弱だから、浅黄の洋服にでもしたらどうだろうといわれましたが、要は相当技術のある人には算盤玉以外に良い待遇を与えることが必要であると私は答えたことがあります。

川浪氏

職人は自分の苦しい体験から、子供を中々自分と同じ職人にはしたくありませんからね。

寺内氏

“近代の名工思い出”を川浪(竹山)さん、一つ。

◆竹山氏の語る名工金作論 不世出の陶技を聞く

川浪氏

^{注②}藤崎太平という人の工場に井手金作さんが働いている時代のことです。なつめ型の八寸の火入れを作るのに四銭五厘かかって出来ていたが、金作には一割五分以上も高く賃銭を与えていたので、別の職工が数は一ように作るから賃銀は一ように払うてもよいでしょうと申し込んだが、藤崎さんは金作の作ったものと御前達の作ったのと一ように払うことが出来るものか。なぜという火入れ一本から金作の作った火入れは粘土は一斤半も少なく済む、おまけに片手で下げても決して壊れぬのに御前達のはすぐ壊れるといったことがありましたが、やはり腕が異なったものでした。実際金作の腕前は見事なもので、中ノ原区から陶山神社に径直三尺の手洗鉢を奉納するのを作るのに金作と小山直作、馬場丑之助の三人に作らせたが、断然金作のものは出来栄が優れています。金作が作る時は轆轤は二人掛りで廻さねば土が堅いので廻し切れなかったものです。金作が十四の時、四尺口の鉢を作り私がそれに絵を描きましたが、その時私は十五でした。その時分の子弟養成は今と異なって賃銀をあてにせず良い細工人を、良い絵書きをといた風に賃銀を沢山とることではなく、技術をとることを目的にしたのが現在とは全く違う傾向でした。

二宮氏

私が有田に参りましたころは薄肉彫のものをやっていたが、香蘭社の北島栄四郎、製磁会社の荒木嘉平、中島達一などという人が継ぎ目なしで二尺まで作っていましたが、今では一寸そういう人は見当りません。

寺内氏

私が学校に赴任した時、轆轤の教師は古川森吉という人だったが、もう大ぶん老齢で、そう働けなかった。然し何かの都合で宴会でもあると、帰りはいつも人力車を呼んで帰ったものだった。なぜあなたは人力車で帰るのかと聴くと“体一つが、もとでだから”とって校長も外の主だった教師もテクでゆくのにこんな風でしたから、若い時は随分うまい人だったのだろうと感じたことです。年木庵で後の帝室技芸員になった深海宗竹翁のものも随分作ったものらしい。

◆焼上ぐれば素地が廻る 興味ある実地研究談

加藤氏

轆轤で思い出しましたが私がまだ深川製磁にいた時の話ですが、宮内省から高さ二尺五寸の蠟燭台を注文されましたが、上のところは幕を張った絵で中央に紋どころを書くのですが、いよいよ出来上がったのを見ると、幕はあたりまえですが紋が下に引きさがっている（辻）勝蔵さんが見えられて大変叱られた。紋を書く時は中央に書いたのだからそんなはずはないといい、それではもう一つやり直そうと注意して火入れをやったところ、また紋だけが横に下がっている。これは不思議だといろいろ研究したところ、何のことはない、轆轤で作ったのは焼くと、或る程度、素地が車で廻って出来たものだけに廻るため紋を中央に書いていても、いつか左廻りに下がって仕舞うことが分ったのでした。

久間氏

先刻古川校長さんのお話を承って感じたことですが、子弟が工業科に入るのをいやがるのはある程度無理のないことでもあります。私の考えでは単に技術だけでなく釉薬の調合とか、絵具の合わせ方といったどちらかといえば単なる職工になるだけの技術ばかりでない。自分で窯焼き—製造家—になるのに必要なことを教えるとそれは可也り子弟にも効果があると思います。

寺内氏

それは実際そんなこともあるでしょうなあ。

◆陶工を敬慕する子供達

武藤氏

私たちの子供は小学校の雑誌とかで名工柿右衛門の苦心などを教わっていますだけに、陶工に対する非常なあこがれ—敬慕—といったものを多分に持っていますが、皆さんのお話を聴いていると何だか幻滅を感じるようですね。

二宮氏

離れて見ているのと、実際、いろいろの苦心をやっている人との違いとでもいわねばならないかと考えます。

金原氏

現在の有田焼の範囲を侵すものは何でしょうかね。

松本（佩）氏

ガラス、珪瑯といったものでしょう。

寺内氏

用途から起こるものが多いと考えます。値段はそう問題ではないと思う。それに焼き物はこわれるという恐れが余計危険視されているかも知れない。磯松さん、どんなものでしょう、こわれない焼き物はできますか。

磯松氏

現在の研究では今の約二、三倍までくらは強いものができていることになっていますが。

二宮氏

しかし、できるにしましても今のような綺麗な色彩や型がそれに应用できるかどうかは、むずかしいことでしょうね。

《注》

- ①深川六助～明治5年生まれ。江越校長の推薦を受け上京。森文部大臣の家に寄宿しながら勉学。その後、横浜や名古屋で貿易業に従事し、病のため帰郷。郡会議員、県会議員を歴任し、有田幼稚園の開設や陶器市の提唱など、大正時代の有田をリードした。
- ②藤崎太平～江戸時代から続いた岩谷川内の窯焼き。窯は現在のバイパス付近にあったといわれる。

●町屋で模型を展示しました！●

11月23日から町内で開催された「秋の陶器市祭り」期間中、子供たちが制作した模型を大樽・手塚家の蔵で展示しました。これらは夏休みに実施した町屋の模型づくり教室の作品です。伝統的な白壁土蔵造りの室内の中央に、さまざまな町屋が並び、祭りを訪れた観光客に未来の有田皿山を背負っていく子供たちの意気込みを見ていただけたのではないかと思います。

協力いただいた手塚家始め、関係者の皆様に御礼申し上げます。



土蔵内に子供たちの作品が並び

企画展「お披露目展」 開催中

現在、今年度の企画展「お披露目展」を開催しています。これらは近年資料館に寄贈していただいた資料を中心に、明治時代のパスポート、絵葉書や電気火鉢などの資料約200点余を展示しています。

おそらく昔は使ったことがあるという資料もあるかと思えます。また、今まで見たこともないという珍しい資料もあるかと思えます。

11月というのは資料館の周囲が一年の内でも最も美しい風景となります。年々紅葉も色鮮やかさを増してきました。12月に入ると落ち葉のころとなりますが、それもまた風情があります。自然を堪能しながら企画展にもお越しく下さい。

- ・ 期 間 平成18年12月24日(日)まで
- ・ 開館時間 9時～16時30分
- ・ 入館料 無料



ランドセル



明治時代のパスポート



東京にあった香蘭社支店
(年代不明)

古を訪ねて

皿山ウォーキング・パート10開催

10回目の皿山ウォーキング(教育委員会生涯学習課と共催)を11月15日(水)に行いました。

今回は46名という過去最多の参加者で、心地よい秋空の下、旧西有田町からはバスで有田町体育館まで移動し合流。軽く体操をして出発し、波佐見と伊万里道の分岐点である本町の追分を通り、内山地区へと歩きました。途中、報恩寺境内にある久富与平の鯨の石碑や「李参平之墓」を見ながら観音山へ登りました。その後、法元寺では佐賀藩の陶器祈禱所時代の版木や古文書を見学し、白川までの道を歩きました。

恒例となった春秋2回の皿山ウォーキングですが、町の歴史をたどりながら体力増進を図る一石二鳥の行事です。今回残念ながら参加されなかった皆さんも、来年の春はぜひ参加ください。



ウォーミングアップをして出発

●人事往来●

3月から空席となっていました館長は、11月1日付で木本信昭教育長が兼任することになり、副館長に尾崎葉子が就任しました。今後ともよろしくお願ひします。

季刊『皿山』

通巻72号(平成18年12月1日)
編集・発行 有田町歴史民俗資料館

〒844-0001 佐賀県西松浦郡有田町泉山1丁目4-1
☎0955-43-2678 FAX0955-43-4185